

巻頭言

H 臨床文藝医学会副理事長、内科医

教師は必ず現れる。小林秀雄は、昭和36(1961)年8月の講演・学生との対話の中で、このように説いた。教師とは一体何を指すのだろうか。

いきなりだが人間とは、その生とは、いったい何であろうか。何のためにあるものだろうか。我々は、より高次の世界に向かい進歩を続ける存在か、それとも実は同じ場所で延々と反復して回転する輪だろうか。私は内科学・診断学の師から、二元論は危険なものだと教わった(スペクトラムやグレーゾーンで考えることの大事さ)。だが極論は、初学者にとっては、手がかりがつかみやすく都合がいい。まずはここから始めてみたい。

一般に人々は、人は似たような過ちを犯しながらもその度に反省と学習をし、科学を始めとした知見を積み重ね、真理を探求し、盲信を排除して、少しずつ進歩と調和を成し遂げてきた、と自負しているのではないだろうか、多分そうだろうとおもう。あるいは、あれは14,5歳の頃だったか、数学の家庭教師Wは「Hくん、宇宙の意思はですね、人間にもっと賢くなれ、と言ってるんです」と説いた。(余談だがWはこの他、量子物理学の簡単な話(机の上の鉛筆と机は量子の世界では行き交っている、通り抜ける可能性もある、しかし極めてそれは低いため人は通常そ

れを「ありえない」と捉える)や、「人間関係に捕らわれている間に成績は伸びない、故に今すぐ部活を辞めよ」など、様々な教えを説いてくれた人物であった。)宇宙の意思の存在証明にはここでは拘らずに、少なくとも人は、より高度な知性を、アイデアとして持つ存在だというのは否定しようのないことと考える。

さて快感ではなく未来への希望こそが報酬系の本質であろうという議論を最近、耳にした。また人は様々な因子で快樂を得ることが知られるが、似たような2者を区別すること、「わかる」ことは、知の快樂であり、2-3歳くらいの幼子はその快樂を味わっている瞬間に出くわすことがあると思う(親業を経た方にとってはきつと当然のことでしょう)。私はこの快樂原理(特に知的快樂)こそ、人を人たらしめてきた、本質的なシステムかと考えてきた。しかし、気持ちのよさだけではなく、我々は期待すること、未来に希望を抱くことで、困難や艱難辛苦を乗り越えてきたという。それは尤もらしい説であり、直感に従う。

では一方で、繰り返しているという説に関してはどうだろうか。これはこれで、やはり相当な真実みをもって我々に迫ることではないか。歴史は繰り返している、とはよくいったもので、どれだけ進歩が

見られたようであっても、人の行いは 50 歩 100 歩で、生まれ、出逢い、死ぬ。食べ、SEX する。宇宙自体が生成と消滅を繰り返して現在 50 回目程度ではないかと、科学的に導いている人もあると聞いた。

これはどちらかが真実という話ではなく、どちらの世界を信じたいか、あるいはその時の気分で左右されそうな話でもある。ただ、どっちでもええやん、とって話題から避けるには惜しい、と私は思う。面白いからである。こういう話が。好きなのである。そして、教師の話がほとんど、できなかった。ただ、コルトレーンは「私はグルになりたい」と語ったという話があり、一方で「なぜあのような前衛的な演奏をするのですか」といった質問に「だって皆、それが聞きたいみたいだから」などと答えたという話もあって、人間味があるなあと思っています(Twitter 出典です、思い出しバイアス増々)。

発達障害が人間味というコトバに置き換わっていけないかと思っています。そんな簡単な話ではないのは承知しているつもりですが。だけど、また変わっていくのだと思います。

多くの人々が、世界の加速と変化に好奇心と不安を感じているであろう西暦 2023 年 4 月に、那覇のホテルで。(H)